一般演題（1B6-1）

睡眠計を用いた遷延性意識障害患者の睡眠評価

三文字　郁[1]、三條　加奈子[1]、遠藤　裕司[1]、大友　昭子[1]、栗村　由紀子[1]、川熊　のぶい[1]、
長嶺　義秀[2]、阿部　浩明[3]、藤原　悟[4]

[1]一般財団法人 広南会 広南病院・東北療護センター 看護部、[2]広南病院・東北療護センター 看護部 診療部、
[3]広南病院・東北療護センター リハビリテーション部、[4]広南病院 脳神経外科

【目的】睡眠とは「周期的にくり返す意識を喪失する生理的な状態」と定義され、意識障害と睡眠の境は曖昧な場合もあり、その判断は難しい。これまで遷延性意識障害（以下、PVS）患者に対し日中の覚醒を促すケアを行い、夜間睡眠を確認するため脳波測定で評価したが、健常者にみられる睡眠波形そのものが確認できず評価は困難であった。そこで「睡眠計スリープスキャン」（以下、睡眠計）を用い睡眠状態の評価を行い、PVS患者の睡眠特性の差異を広南スコア（以下、スコア）別に比較検討したので報告する。
【方法】対象：当センターPVS患者のうち脱却者を除く睡眠計で計測が可能であった16名（男性13名、女性3名、平均年齢43.8歳）。生活リズムを変えずに夜間（16:30～8:30）計測した。スコア最重症例（A群）、重症例～軽症例（B群）の2群に分類し、レム睡眠、ノンレム睡眠、浅睡眠、深睡眠、および覚醒時間の割合と、中途覚醒時間、体動回数を比較した。
【結果】レム睡眠時間は、A群（11.7±1.7％）がB群（7.8±3.7％）より優位に多かった。一方で、覚醒時間はA群、B群に有意差はみられなかった。
【考察】A群はレム睡眠の割合がB群より多かったことから、A群では寝ているように見える状態でも眠りの質はB群と比べ浅い場合が多い可能性があると考えられる。睡眠計の評価はPVS患者の睡眠状態を反映するものと思われ、ケアの効果を検証する一つの指標となる可能性がある。今後は測定条件の調整や、日中睡眠データの収集も検討している。